

28日が近づくまで腰を上げない、悪い癖がいつまでも治りません。与えられたテーマに応えられないので、今度も思いつくままに駄文を並べますが大目にみていただければ幸いです。

- ① 洋上風力発電： 陸奥湾の洋上風力発電で贈収賄が報じられている。高緯度では太陽光発電よりも風力発電が適していて、外海より湾内の方が工事がしやすい好条件なのに醜い事態で頓挫してしまったのが残念だ。2人が馬に関わらなかつたら展開が違っただろう、背後にギャンブルがあった。エネルギーを冒瀆する馬鹿な話だ。過去3件で三菱商事に敗れた焦りがあったかもしれないが、法を曲げてでもという邪道は許されない。エネルギーの地産地消からすれば青森県がなぜ絡まないのか、再エネが大資本の手中にあるのは資本主義社会では当たり前なのか。青森は原子力関連事業で辛酸を舐めている、洋上風力発電事業を手掛ける優先権を与えられても良いのではないか。

- ② 三浦綾子ファン： 2年近く前から彼女の小説に嵌っているが、今回はちょっと動機が違う。上関町（広島）が核廃棄物施設の調査に手をあげた報道が話題になったとき、MSさんにその話をしたら「三浦綾子さんがずっと前エッセイに書いてますよ、Nさん読まれたら」とご自分の蔵書を貸してくださった。1985年北海道新聞社発行の単行本で短い50のエッセイ集で「ゾツとする話」に付箋がついていた。当時“幌延町で『高レベル放射性廃棄物施設』の誘致”が世間を騒がせたが、小説家も黙っておれなかったのだろう。自分の見解を分かり易く述べ、アメリカの実態や、原発のリスクを予言している。聖書に出てくる予言にもふれた5頁である。原発が今ほど悪者扱いされなかった40年前に先見の明があったのだと敬服するばかりだ。《ナナカマドは旭川市のシンボルツリーです》



- ③ みんなのなつかしい一冊： 8月に出版されたこの本を地元図書館の新着書棚で見つけた。毎日新聞の「今週の本棚」に連載された読書案内（書評でなく感想文？）を一冊にまとめたものである。登場する50人は多分野にわたる多彩な人達であるが、拾い読みすると退屈しない。大学院講師で女性哲学者の三木那由他さんは枕草子現代語訳を「清少納言の筆致は優雅というよりは、むしろ皮肉や毒舌が混じる軽妙なエッセイだ」という。

長老女官と女同士の恋物語もあって妙な気分させられる。ドストエフスキーに惚れ込んだ斎藤孝は「カラーゾフの兄弟」を人生案内のようにみている、遅巻きながら読んでみたい気がする。アグネスチャンは「フラニーとズーイ」をクリスチャンの目で選んでいる。この本に導かれて多くの本を読みたいと思っている。

- ④ **GIANT**その後： 13年来の愛車、最近はヘルメットを被るのに慣れて恥ずかしいとも思わなくなってきた。3年前の日暮れどき、大池堤の急坂を歩いて登り切り車道を横切ろうとペダルに足をかけて転倒、左親指の爪先を6針縫う怪我をした。原因は右ハンドルにつけたのバックミラーの鏡の縁が飛び出した創傷だった。これに懲りて、以後バックミラーなしでいたが耳が遠く、後ろを振り返るのもままならぬ、車道左側を規則通りに走っていても右側を大小様々な車が通り過ぎるまでわからない。後ろが盲目では危険だ。最近右ハンドルの端に付く洒落たミラーを知って馴染みのサイクルショップで訊ねたら誂え向きを取り付けてくれた。安心のGIANNTを乗り続けたい、近所の人たちに「あの歳でよう乗ってるなあ」と見られている気がするが、健康なればこそ有難いことだ。 (おわり)

ゾツとする話

幌延町に「高レベル放射性廃棄物施設」を誘致するという。賛否両論かましいが、是にせよ非にせ、お互いこの「高レベル放射性廃棄物」なるものが、いかなるものか知っているのだろうか。正直言って私は知らなかった。今もよく知ったわけではない。けれども誘致には反対だ。放射性廃棄物と聞いただけでゾツとする。原子炉でウランを燃やした燃えかすだから、原発実験のあの死の灰と似たものだろう。あのビキニの実験で、マグロ漁に出かけていた久保山愛吉さんが死の灰をかぶって死んだ。私は何しろ命根性が極めて汚ない。雨がパラパラ降ってくる、もしやこの雨には放射能が含まれてはいないかと思うほどだ。たとえ誘致賛成者が「安全だ、安全だ」と、いくら声を大にして叫んでも、私は信じない。

そんなに安全なものなら、何で八百億もの金が幌延町に入ってくるのだろうか。この八百億は、言ってみれば迷惑料ではないか。八百億と聞いて、いささか馬鹿々々しい仮説が胸に浮か

んだ。誰かが大きなダンボールの箱を預ってほしいと、わが家にやってくる。礼金は一億円である。その人物は、中味は安全無害だと強調する。が、こんな話にオイソレと飛びつく者がいるだろうか。何ともうす気味の悪い話に、誰しも拒絶するのが当然だろう。

一九五七年、ソ連のウラル地方で、この「高レベル放射性廃液」が、保管中に大爆発を起したという。それは実に火山のような大爆発で、多数の死者と被爆者が出、その地方一帯は半永久的に居住不可能の地になったという。八百平方杆乃至千二百平方杆に及んだというから恐ろしいはなしである。

この廃棄物は、自分の放射能によって高熱を発しつつける性質があり、冷やしつづけねば爆発を起すらしい。また、無事保管しつつけたとしても、六十万年後なお毒性は絶無にならないという。一旦この施設を誘致したなら、子々孫々に至るまで、いつ、いかなる大惨事が発生するか、測り知れないことになるのだ。

「当店の魚は当地でとれたものではありません」と、高浜原発周辺の魚屋の貼り紙に書いてあったそうだが、

「当店の牛乳、チーズ、バターは、天北原野のものではありません」などと、いつ貼り紙を出す店が出ないとも限らない。

もし、この廃棄物が本当に安全ならば、日本の各地で誘致合戦が展開される筈だ。「安全なものなら、疾うに田中角栄元総理が新潟に持って行ったよ」と冗談を言った人がいるが、まさ

に同感である。危険なら危険とはっきり言うべきだ。「死の灰はいらない」という誘致反対道民連絡会議発行のパンフレットの、数々のデータを見ながら、私はそう思った。

ところで先年「ノストラダムスの大予言」が、多くの人の関心を惹いた。いや、今も興味を持つている人は少くない。その真偽はともかく、聖書にも数々の予言がある。聖書の予言は「神から預った言葉」の意で、単なる「予言」ではない。「この街は亡びる」とか、「この国は四散する」などの言葉が随所にあつて、その予言の言葉は、実に確実に成就しつつあると言われる。考古学的にもそのほとんどが証明されているとも聞いた。

聖書には、今後起きるであろう世界の惨害についても書かれてある。以下少しく抄出してみよう。

へ血のまじった電と火とがあらわれて、地上に降ってきた。そして、地の三分の一が焼け、木の三分の一が焼け、また、すべての青草も焼けてしまった

へ火の燃えさかっている大きな山のようなものが、海に投げこまれた。そして、海の三分の一は血となり、海の中の造られた生き物の三分の一は死に、舟の三分の一がこわされてしまった
 へ太陽の三分の一と月の三分の一と、星の三分の一とが打たれて、これらのものの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は明るくなくなり、夜も同じようになった

へ底知れぬ所の穴が開かれた。すると、その穴から煙が大きな炉の煙のように立ちのぼり、その穴の煙で太陽も空気も暗くなった（以上新約聖書ヨハネ黙示録より）

へその日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう（新約聖書ベテロ第二の手紙より）

ヨハネ黙示録は紀元一世紀の終り頃に書かれたというから、千九百年近くも昔の言葉である。その長い間、信者たちはこれを読み信じてきた。私がキリスト教を信じたのは一九五二年、即ち戦後である。既に、広島と長崎に原爆が落ちていた。それにもかかわらず、このような箇所は荒唐無稽に思っていた。が、今では全くこの予言が信じられる。よくもこんな日の来ることを、千九百年も前の昔から見透されていたものと、体のふるえる思いがする。

人間の愚かさを、神は知っておられた。人間の奢り、傲慢を神は知っておられた。人間の知恵はともすれば自分を亡びに招く。工場廃液によるイタイイタイ病、樹林乱伐による地球の砂漠化、原子科学発達による人類の悲惨、何とも愚かな話である。

原発反対を言えば、「原子力発電は安上りなのだ」と反論される。一体企業にとっては、利益を上げることが至上命令なのだろうか。それが使命なのだろうか。それ以上の使命はないのだろうか。金をもうける以上に大事なことはないのだろうか。企業は本来人の役に立つたためのもではないのか。利益は人の幸福に役立った結果与えられるものではないのか。こんな考えは現実を知らぬ理想論に過ぎないのだろうか。

「死の灰はいらない」のパンフレットによると、今年の九月四日の北海道新聞には次のような記事が出ていたようだ。

へアメリカでは「原発は石炭火力よりもコスト高だ」とする専門家の報告が相ついで公表されており、原発の新規建設を全面的に中止するよう主張している専門家もいる。

これが単なる風評ではないことを裏づけるかのように、次の事実がパンフレットには報じられている。即ち一九七二年から一九八四年までの十三年間に原子炉発注キャンセルが相次ぎ、その数は百五件。そのうちの一件、ウイリアムズ原発は、九七％まで建設が進んでいたという。そして現在、アメリカでは新規の発注ゼロ、建設計画もまたゼロだという。理由は無論北海道新聞の記事にあるとおり、原子力発電がコスト高であるためだという。

日本だけが依然としてコストが安上りなのだろうか。いや、安い高いの問題ではない。事は人間の生存に関わる問題である。文明は謙遜に発達されなければならぬ。一人の生命をも大事にする社会を、ひたすら祈ってやまない。

資料Ⅱ「死の灰はいらない」原発廃棄物施設誘致反対道民会議刊